6

夏目漱石 III

現代日本文学館

6

小林秀雄 編集

現代日本文学館 6
夏目漱石 3

昭和四十二年十月一日第一刷

著者　夏目漱石
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価　四八〇円

Printed in Japan　本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

道草 5
明暗 150
注解 459
解説 江藤淳 474
年譜 481
挿画 島村三七雄「道草」
織田広喜「明暗」

伝記は「夏目漱石(一)」に収録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夏目漱石
(三)

道草

一

健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋しみさえ感じた。

彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早くその臭を振るい落とさなければならないと思った。そうしてその臭のうちに潜んでいる彼の誇りと満足にはかえって気が付かなかった。

彼はこうした気分をもった人にありがちな落ちつきのない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二返ずつ規則のように往来した。

ある日小雨が降った。その時彼は外套も雨具も着けずに、ただ傘を差しただけで、いつもの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行った。すると車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会った。その人は根津権現の裏門の坂を上がって、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行く手を何気なく眺めた時、十間ぐらい先からすでに彼の視線に入ったのである。そうして思わず彼の眼をわきへ外らさせたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍この男の眼鼻立ちを確かめる必要があった。それでお互いが二三間の距離に近づいたころまた眸をその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿をじっと見詰めていた。

往来は静かであった。二人の間にはただ細い雨の糸が絶え間なく落ちているだけなので、お互いがお互いの顔を認めるには何の困難もなかった。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まったなり、少しも足を運ぶ気色なく、じっと彼の通り過ぎるのを見送っていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて回るのに気が着いたくらいであった。

彼はこの男に何年会わなかったろう。彼がこの男と縁を切ったのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔の事であった。それから今日までに十五六年の月日が経っているが、その間彼らはついぞ一度も顔を合わせた事がなかったのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで変わっていた。黒い髭を生やして山高帽を被った今の姿と坊主頭の昔

の面影とを比べてみると、自分でさえ隔世の感が起こらないとも限らなかった。しかしそれにしては相手の方があまりに変わらなすぎた。彼はどう勘定しても六十五六であるべきはずのその人の髪の毛が、なぜ今でも元の通り黒いのだろうと思って、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押し通しているその人の特色も、彼には異な気分を与える媒介となった。

彼はもとよりその人に出会う事を好まなかった。万一出会ってもその人が自分より立派な服装でもしていてくれればいいと思っていた。しかし今目前見たその人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思えなかった。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりについて判断したところ、どうしても中流以下の活計を営んでいる町家の年寄としか受け取れなかった。彼はその人の差していた洋傘が、重そうな毛繻子であった事にまで気が付いていた。

その日彼は家へ帰っても途中で会った男の事を忘れ得なかった。折々は道端へ立ち止まってじっと彼を見送っていたその人の眼付きに悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかった。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があっても、細君に話さないのが彼の癖であった。細君も黙っている夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であった。

二

次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通った。その次の日も通った。けれども帽子を被らない男はもうどこからも出て来なかった。彼は器械のようにまた義務のようにいつもの道を往ったり来たりした。

こうした無事の日が五日続いた後、六日目の朝になって帽子を被らない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅やかした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間もほとんどこの前と違わなかった。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、いつもの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であった。何人をも不安にしなければやまないほどな注意を双眼に集めて彼を凝視した。隙さえあれば彼に近付こうとするその人の心がどんよりした眸のうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくその傍を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起こった。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家へ帰った時も、彼はついに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしまった。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もうその時分にはこの男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京でなかったので、細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。しかし噂としてだけならあるいは健三自身の口からすでに話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知っていないとも限らなかった。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなか

った。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮かんでくる結婚後の事実が一つあった。五六年前彼がまだ地方にいるころ、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。その時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかった。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

その時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があった。それからその女に関聯して、ぜひともこの帽子を被らない男を引合いに出す必要もあった。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌買いな彼がどのくらい綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。細君は女の事だからまだ判然覚えているだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊してみる気も起こらなかった。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子を被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌いだった。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起こす媒介となるからであった。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈托している余裕を彼に与えなかった。彼は家へ帰って衣服を着換えると、すぐ自分の書斎へはいった。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のように積んであるような気持でいるのである。けれども実際から云うと、仕事をするよりも、しなければならないという刺戟の方が、はるかに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなければならなかった。

彼が遠い所から持って来た書物の箱をこの六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端から取り上げては二三頁ずつ読んだ。それがため肝心の書斎の整理はいつまで経っても片付かなかった。しまいにこの体たらくを見るに見かねたある友人が来て、順序にも冊数にも頓着なく、あるだけの書物をさっさと書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。

三

健三は実際その日その日の仕事に追われていた。家へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心はほとんど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へもめったに足を踏み込めないくらい忙がしがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断わったが、彼は心のうちで、他人にはどうしてそんな暇があるのだろうと驚ろいた。そうして自分の

時間に対する態度が、あたかも守銭奴のそれに似通っている事には、まるで気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は朧気にその淋しさを感ずる場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それがかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼にとって大した苦痛にもならなかった。

「教育が違うんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があった。

「やっぱり手前味噌よ」

これはいつでも細君の解釈であった。

気の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかった。そう云われるたびに気不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思った。ある時は叱り付けた。またある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張りをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するにすぎなかった。

彼には一人の腹違いの姉と一人の兄があるぎりであった。親類と云ったところでこの二軒より外に持たない彼は、不幸にしてその二軒ともあまり親しく往き来をしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事実は、彼にとってもあまり気持のいいものではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ帰って以後すでに三四回彼らと顔を合わせたという記憶も、彼には多少の言訳になった。もし帽子を被らない男が突然彼の行く手を遮らなかったなら、彼はいつもの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往来するだけで、当分外の方角へは足を向けずにしまったろう。もしその間に身体の楽に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切った四肢を畳の上に横たえて半日の安息を貪るにすぎなかったろう。

しかし次の日曜が来たとき、彼はふと途中で二度会った男の事を思い出した。そうして急に思い立ったように姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四ツ谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引っ込んだ所にあった。彼女の夫というのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であった。しかし年齢は同い年か一つ違いで、健三から見ると双方とも、一廻りも上であった。この夫がもと四ツ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼がそこをやめた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのがいやだといって、姉は今の勤め先に不便なのも構わず、やっぱり元の古ぼけた家に住んでいるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四

この姉は喘息持ちであった。年が年中ぜえぜえ云っていた。それでも生まれ付きが非常な癇性なので、よほど苦しくないと決してじっとしていなかった。何か用を拵えて狭い家の中を始終ぐるぐる廻って歩かないと承知しなかった。その落ちつきのないがさつな態度が健三の眼にはいかにも気の毒に見えた。

姉はまた非常に饒舌る事の好きな女であった。そうしてその喋舌り方に少しも品位というものがなかった。彼女と対坐する健三はきっと苦い顔をして黙らなければならなかった。

「これが己の姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸にはいつでもこういう述懐が起こった。

その日健三は例のごとく襷を掛けて戸棚の中を掻きまわしているこの姉を見出した。

「まあ珍らしくよく来てくれたこと。さあお敷きなさい」

姉は健三に座蒲団を勧めて縁側へ手を洗いに行った。

健三はその留守に座敷のなかを見廻わした。欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸かっていた。その落款に書いてある筒井憲という名は、たしか旗本の書家か何かで、大変字が上手なんだと、十五六の昔ここの主人から教えられた事を思い出した。彼はその主人をそのころは兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行ったものである。そうして年から云えば叔父甥ほどの相違があるのに、二人してよく座敷の中で相撲をとっては姉から怒られたり、屋根へ登って無花果を拐いで食って、その皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。主人が箱入りのコンパスを買ってやると云って彼を騙したなりいつまで経っても買ってくれなかったのを非常に恨めしく思った事もあった。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪って来ても勘忍してやらないと覚悟をきめたが、いくら待っていても、姉が詫まらないので、仕方なしにこちらからのこのこ出掛けて行ったくせに、手持無沙汰なので、向うでおはいりというまで、黙って門口に立っていた滑稽もあった。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。そうしてそれほど世話になった姉夫婦に、今は大した好意をもつ事が出来にくくなった自分を不快に感じた。

「近頃は身体の具合はどうです。あんまりひどく起こる事もありませんか」

彼は自分の前に坐った姉の顔を見ながらこう訊ねた。

「ええ有難う。お蔭さまで陽気がいいもんだから、まあどうかこうか家の事だけはやってるんだけれども、——でもやっぱり年が年だからね。とても昔しのようにがせいに働く事は出来ないのさ。昔健ちゃんの遊びに来てくれた時分にゃ、随分尻ッ端折りで、それこそお釜のお尻まで洗ったもんだが、今じゃとてもそんな元気はありやしない。だけどお蔭様でこうやって毎日牛乳も飲んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉にやる事を忘れなかったのである。
「少し痩せたようですね」
「なにこりゃ私の持前だから仕方がない。昔から肥った事のない女なんだから。やッぱり癇が強いもんだからね。癇で肥る事が出来ないんだよ」
姉は肉のない細い腕を捲って健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半円形の暈が、怠そうな皮で物憂げに染めていた。健三は黙ってそのぱさぱさした手の平を見詰めた。
「でも健ちゃんは立派になって本当に結構だ。お前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生きて会う事はむずかしかろうと思ってたのに、それでもよくまあ達者で帰って来られたのね。お父さんやお母さんが生きておいでだったらさぞお喜びだろう」
姉の眼にはいつか涙が溜まっていた。姉は健三の子供の時分、「今に姉さんにお金が出来たら、健ちゃんに何でも好きなものを買って上げるよ」と口癖のように云っていた。そうかと思うと、「こんな偏窟じゃこの子はとても物にゃならない」とも云った。健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮かべて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく会わなかった姉の老けた様子が一層健三の眼についた。
「時に姉さんはいくつでしたかね」
「もうお婆さんさ。取って一だものお前さん」
姉は黄色い疎らな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健三にも意外であった。
「すると私とは一*廻り以上違うんだね。私ゃまたせいぜい違って十か十一だと思っていた」
「どうして一廻りどころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さんは。良人が羊*の三碧で姉さんが四緑なんだから。健ちゃんはたしか七赤だったね」
「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」
「繰ってみてごらん、きっと七赤だから」
健三はどうして自分の星を繰るのか、それさえ知らなかった。年齢の話はそれぎりやめてしまった。
「今日はお留守なんですか」と比田の事を訊いてみた。
「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に三度か四度で済むんだけれども、ひとに頼まれるもんだからね。それに一晩でも余計泊まりさえすればやっぱり若干かになるだろう、それでついひとの分まで引き受ける気にもなるのさ。このごろじゃあっちへ寝るのとこっちへ帰るのと、まあ半半ぐらいなものだろう。ことによると、向うへ泊まる方がかえって多いかも知れないよ」
健三は黙って障子の傍に据えてある比田の机を眺めた。硯箱や状袋や巻紙がきちりと行儀よく並んでいる傍に、簿記用の帳面が赤い背皮をこちらへ向けて、二三冊立て懸けてあった。それから綺麗に光った小さい算盤もその下に置

いてあった。
噂によると比田はこのごろ変な女に関係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに囲っているという評番であった。宿直だ宿直だと云って宅へ帰らないのは、あるいはそのせいじゃなかろうかと健三には思えた。
「比田さんは近頃どうです。大分年を取ったから元とは違って真面目になったでしょう」
「なにやッぱり相変らずさ。ありゃ一人で遊ぶために生まれて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だって、お金さえありゃ年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなったようだよ。もとは健ちゃんも知ってる通りの始末で、随分烈しかったもんだがね。蹴ったり、敲いたり、髪の毛を持って座敷中引っ摺り廻したり……」
「その代り姉さんも負けてる方じゃなかったんだからな」
「なに妾ゃ手出しなんかした事あ、ついの一度だってありやしない」
健三は勝気な姉の昔を考え出してつい可笑しくなった。二人の立ち廻りは今姉の自白するように受身のものばかりでは決してなかった。ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だった。それにしてもこの利かぬ気の姉が、夫に騙されて、彼が宅へ帰らない以上、きっと会社へ泊まっているに違いないと信じ切っているのが妙に不憫に思われて来た。
「久しぶりに何か奢りましょうか」と姉の顔を眺めながら云った。
「ありがと、今お鮨をそういったから、珍らしくもあるまいけれども、食べてっておくれ」
姉は客の顔さえ見れば、時間に関係なく、何か食わせなければ承知しない女であった。健三は仕方がないから尻を落ちつけてゆっくり腹の中に持って来た話を姉に切り出す気になった。

六

近頃の健三は頭を余計遣いすぎるせいか、どうも胃*の具合がよくなかった。時々思い出したように運動してみると、胸も腹もかえって重くなるだけであった。彼は要心して三度の食事以外にはなるべく物を口へ入れないように心掛けていた。それでも姉の悪強いには敵わなかった。
「海苔巻なら身体に障りゃしないよ。せっかく姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思って取ったんだから、ぜひ食べておくれな。いやかい」
健三は仕方なしにうまくもない海苔巻を頬張って、いい加減煙草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。
姉があまり饒舌るので、彼はいつまでも自分の云いたい事が云えなかった。訊きたい問題を持っていながら、こう受身な会話ばかりしているのが、彼には段々むず痒くなって来た。しかし姉にはそれが一向通じないらしかった。
ひとに物を食わせる事の好きなのと同時に、物をやる事

の好きな彼女は、健三がこの前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼にやろうかと云い出した。
「あんなものあ、宅にあったって仕方がないんだから、持っておいでよ。なに比田だって要りゃしないやね、汚ない達磨なんか」
健三は貰うとも貰わないとも云わずにただ苦笑していた。すると姉は何か秘密話でもするように急に調子を低くした。
「実は健ちゃん、お前さんが帰って来たら、話そう話そうと思って、つい今日まで黙ってたんだがね。健ちゃんも帰りたてでさぞ忙がしかろうし、それに姉さんが出掛けて行くにしたところで、お住さんが居ちゃ、少し話しにくい事だしね。そうかって、手紙を書こうにも御存じの無筆だろう……」
姉の前置きは長たらしくもあり、また滑稽でもあった。小さい時分いくら手習いをさせても記憶が悪くって、どんなに平易しい字も、とうとう頭へはいらずじまいに、五十の今日まで生きて来た女だと思うと、健三にはわが姉ながら気の毒でもありまたうら恥ずかしくもあった。
「それで姉さんの話ってえな、一体どんな話なんです。実は私も今日は少し姉さんに話があって来たんだが」
「そうかいそれじゃお前さんの方のから先へ聴くのが順だったね。なぜ早く話さなかったの」
「だって話せないんだもの」
「そんなに遠慮しないでもいいやね。姉弟の間じゃないか、お前さん」
姉は自分の多弁が相手の口を塞いでいるのだという明白な事実には毫も気が付いていなかった。
「まあ姉さんの方から先へ片付けましょう。何ですか、あなたの話っていうのは」
「実は健ちゃんにはまことに気の毒で、云いにくいんだけれども、あたしも段々年を取って身体は弱くなるし、それに良人があの通りの男で、自分一人さえよけりゃ女房なんかどうなったって、己の知った事じゃないって顔をしているんだから。——もっとも月々の取高が少ない上に、交際もあるんだから、仕方がないと云えばそれまでだけれどもね……」
姉の云う事は女だけに随分曲がりくねっていた。中々容易な事で目的地へ達しそうになかったけれども、その主意は健三によく解った。つまり月々やる小遣をもう少し増してくれというのだろうと思った。今でさえそれをよく夫から借りられてしまうという話を耳にしている彼には、この請求が憐れでもあり、また腹立たしくもあった。
「どうか姉さんを助けると思ってね。姉さんだってこの身体じゃどうせ長い事もあるまいから」
これが姉の口から出た最後の言葉であった。健三はそれでもいやだとは云いかねた。

七

彼はこれから宅へ帰って今夜中に片付けなければならない明日の仕事をもっていた。時間の価値というものを少し

も認めないこの姉と対坐して、いつまでも、べんべんと喋舌っているのは、彼にとって多少の苦痛に違いなかった。彼はいい加減に帰ろうとした。そうして帰る間際になってやっと帽子を被らない男の事を云い出した。

「実はこの間島田に会ったんですがね」

「へえどこで」

姉は吃驚したような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であった。

「太田の原の傍です」

「じゃお前さんのじき近所じゃないか。どうしたい、何か言葉でも掛けたかい」

「掛けるって、別に言葉の掛けようもないんだから」

「そうさね。健ちゃんの方から何とか云わなきゃ、向うで口なんぞ利けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来るだけ健三の意を迎えるような調子であった。彼女は健三に「どんな服装をしていたい」と訊き足した後で、「じゃやッぱり楽でもないんだね」と云った。そこには多少の同情も籠もっているように見えた。しかし男の昔を話し出した時にはさもさもにくらしそうな語気を用い始めた。

「なんぼ因業だって、あんな因業な人ったらありゃしないよ。今日が期限だから、是が非でも取って行くって、いくら言訳を云っても、坐り込んで動かないんだもの。仕舞にこっちも腹が立ったから、お気の毒さま、お金はありませんが品物でよければ、お鍋でもお釜でも持ってって下さいって云ったらね、じゃ釜を持ってくって云うんだよ。あきれるじゃないか」

「釜を持って行くったって、重くって到底持てやしないでしょう」

「ところがあの業突張りの事だから、どんな事をして持ってかないとも限らないのさ。そらその日の御飯をあたしに炊かせまいと思って、そういう意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄っていい事あないはずだあね」

健三の耳にはこの話がただの滑稽としては聞こえなかった。その人と姉との間に起こったこんな交渉のなかに引っ絡まっている古い自分の影法師は、彼にとって可笑しいというよりもむしろ悲しいものであった。

「私ゃ島田に二度会ったんですよ、姉さん。これから先またいつ会うか分からないんだ」

「いいから知らん顔をしておいでよ。何度会ったって構わないじゃないか」

「しかしわざわざあすこいらを通って、私の宅でも探しているんだか、また用があって通りがかりに偶然出ッくわしたんだか、それが分からないんでね」

この疑問は姉にも解けなかった。彼女はただ健三に都合のよさそうな言葉を無意味に使った。それが健三には空お世辞のごとく響いた。

「こちらへはその後まるで来ないんですか」

「ああこの二三年はまるっきり来ないよ」

「その前は？」

「その前はね、ちょくちょくってほどでもないが、それでも時々は来たのさ。それがまた可笑しいんだよ。来るといつでも十一時ごろでね。鰻飯かなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度のおまんまを一かたけでもいいからひとの家で食べようっていうのがつまりあの人の腹なんだよ。そのくせ服装なんかかなりなものを着ているんだがね。……」

姉のいう事は脱線しがちであったけれども、それを聴いている健三には、やはり金銭上の問題で、自分が東京を去ったあとも、なお多少の交際が二人の間に持続されていたのだという見当はついた。しかしそれ以上何も知る事は出来なかった。目下の島田については全く分からなかった。

八

「島田は今でも元の所に住んでいるんだろうか」

こんな簡単な質問さえ姉には判然答えられなかった。健三は少し的が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所を突き留めようとまでは思っていなかったので、大した失望も感じなかった。彼はこの場合まだそれほどの手数を尽す必要がないと信じていた。たとい尽すにしたところで、一種の好奇心を満足するにすぎないとも考えていた。その上今の彼はこういう好奇心を軽蔑しなければならなかった。彼の時間はそんな事に使用するにはあまりに高価すぎた。

彼はただ想像の眼で、子供の時分見たその人の家と、その家の周囲とを、心のうちに思い浮かべた。

そこには往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いていた。水の変わらないその堀の中は腐った泥で不快に濁っていた。ところどころに蒼い色が湧いていやな臭さえ彼の鼻を襲った。彼はその汚ならしい一廓を——様のお屋敷という名で覚えていた。

堀の向う側には長屋がずっと並んでいた。その長屋には一軒に一つぐらいの割で四角な暗い窓が開けてあった。石垣とすれすれに建てられたこの長屋がどこまでも続いているので、お屋敷のなかはまるで見えなかった。

このお屋敷と反対の側には小さな平家が疎らに並んでいた。古いのも新らしいのもごちゃごちゃに交じっていたその町並は無論不揃であった。老人の歯のようにところどころが空いていた。その空いている所を少しばかり買って島田は彼の住居を拵えたのである。

健三はそれがいつ出来上がったか知らなかった。しかし彼が始めてそこへ行ったのは新築後まだ間もないうちであった。四間しかない狭い家だったけれども、木口などはかなり吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取りにも工夫があった。六畳の座敷は東向きで、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大きすぎるほど立派な御影の石燈籠が据えてあった。

綺麗好きな島田は、自分で尻端折りをして、絶えず濡雑巾を縁側や柱へ掛けた。それから跣足になって、南向きの居間の前栽へ出て、草毟りをした。あるときは鍬を使って、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com